

私は何故か楽聖と崇められているベートーヴェンが大の苦手である。昔あるアメリカの大学の日本人医学者が「ベートーヴェンの音楽は人間の DNA の螺旋形に沿っているので親しみやすい」という説を発表したという話を聞いたことがある。私が好むモーツァルトの音楽は DNA 螺旋に沿っていないらしい。私の DNA の形は平均から外れているのか？あるいは耳が捉える Hz 数領域が人と違うのか？私はベートーヴェンの音楽は耳の穴から直に入ってくる。モーツァルトの音楽は完璧に骨伝導。比較的好きなのはバッハやチャイコフスキー。ドビュッシーやシューベルトも大丈夫。しかし何故かベートーヴェンだけはどうも受け入れがたい。「ベートーヴェンが苦手な人は彼の得意とする弦楽四重奏を聴いてみては？」という推薦もあったが、その弦楽四重奏の最初を聴いただけでもうダメ。学生時代に頑張って聴いた交響曲「運命」のほうがまだいい。「頑張って聴いた」というのは、やはり多くの人が評価するベートーヴェンも聴いてみなくてはと自分でレコードを買ってかけたのであるが、しばらく聴いているうちに眠くなり飽きて部屋を出た。そのあと部屋に戻ったらまだ曲が終わっていませんでしたので、とりあえず曲が終わるまでレコードをじっ〜と見つめていた。止めればいいのに、そこまで頑張った。それほど筋金入り「苦手」なのである。因みに小学校の音楽の時間に鑑賞させられた「田園」の演奏時間中は頭が途中から白紙である。そして未だにベートーヴェンのプログラムは避けて通る私である。これは多分初公開なので、ここで「あの人、来ないわね？」の理由が判明した人もいることだろう。

そもそも私とベートーヴェンの出会いは、幼稚園期に遡る。ある年のクリスマス、5歳年上の従妹が美しい少女雑誌をプレゼントに持ってきてくれた。その雑誌の付録にウィーン少年合唱団の写真と、チロル・ワンピースを着た美しい少女が描かれたソノシート（紙のレコード）が付いていた。A面はバダジェフスカの「乙女の祈り」でB面はベートーヴェンの「エリーゼのために」だった。早速プレイヤーにかけてもらい「乙女の祈り」が始まるとすぐに私はその曲の虜になった。特に出だしを何度も聴きたくてエンドレスのように繰り返しかけてもらった。そして「B面も聴かなければ」とかけてもらってしばらくすると私はとても悲しくなり「もう悲しいから止めて」と言って止めてもらった。熱烈に気に入った曲の後なので期待感も薄かったが、それでも曲の出だしは比較的好きなのに、その先がいけない。これが「苦手」の根源である。

そして小学校へ上がると教室にはオルガンがあり、ある日の放課後、男子が「エリーゼのために」を弾き始めた。私はあの悲しいメロディーのところへ到達しない前にと、あわてて家に帰った。こんな具合であるから私はこの曲を未だに最後まで聴いていない。ウィーンのベートーヴェンの自宅前を通過するときも緊張したが、やはり私の DNA 螺旋は彼の音楽と合っていないらしい。「ラセン」じゃなくて「ラテン」かもしれない。とりあえず見た目も機能も人類だけけれど。ただ幼い頃ペニシリン注射をバンバン打ったせいか、体質的には少し違うかもしれない。というわけで、たとえ著名な指揮者であっても演奏会には行かないだろうな、きっと。ここのところいただく演奏会のチラシは殆どベートーヴェンなので、そんなわけで失礼します、悪しからず。

私にとってモーツァルトの音楽が羽ペンでしたための手紙なら、ベートーヴェンの音楽は太マジックで書かれた手紙である。全曲聴ける日は来るだろうか？(2012.8.8)